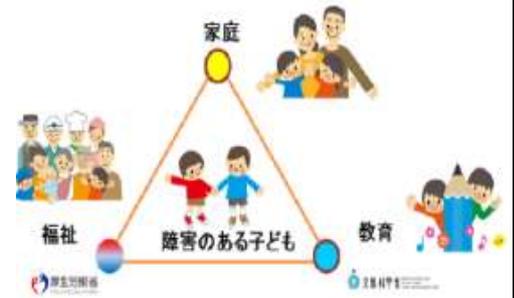


インクルージョンとダイバーシティ

—ひとりひとりの行動が、コロナ禍の多様性社会を一つにする—

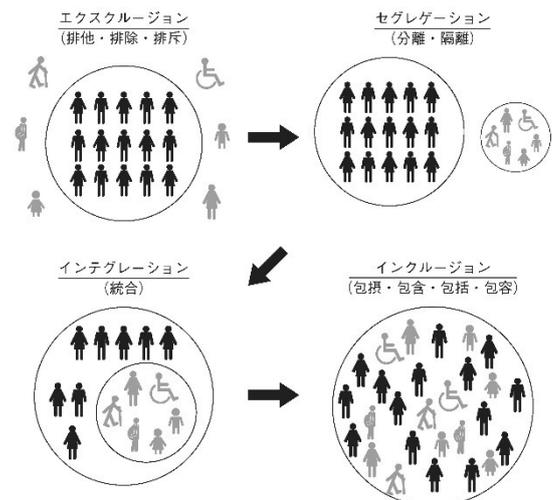


研究員 荒巻恵子

ここ数カ月、新型コロナウイルスの影響で、私たちの生活は大きく変わりました。

ウイルスから身を守ること、家族や友人とも協力して感染予防をすること、人に感染させないように自粛生活によって行動を制約すること、・・・今は、みんなが協力して、健康な社会を目指した、ひとりひとりの行動が求められます。みんなの協力が社会を一体化させます。インクルージョンという言葉は、まさに、人々の行動によって、社会が一体になる、一つになる状態を表します。インクルージョンの社会は、ウェルビーイングと言われる健康で幸福な社会です。そして、このインクルージョンの社会は、高齢者も子どもも、障害者も健常者も、男性も女性も、人種も問わない多様性社会でもあります。この多様性のことをダイバーシティと言います。インクルージョンの社会とは、多様性社会であり、健康で幸福な地球であると言えます。

右の図は、社会の状態を段階的に示したものです。右下のインクルージョンの状態に向かうための4段階を示しています。はじめは、左上の排他・排除・排斥といったエクスクルージョンの状態、次に右上の分離・隔離のセグレグレーションの状態、次に左下の統合のインテグレーションの状態、最後に、包摂・包含・包括・包容というインクルージョンの状態です。



新型コロナウイルスによって、人々や社会は、分離・隔離しているセグレグレーションの状態になっていました。次のインテグレーションの状態では、隔離されたものを受け入れることが大切です。今の非常事態宣言解消後の状態です。コロナ禍の社会を受け入れ、今後、インクルージョンという一つの状態にするためには、境界線を外していく必要があります。すべての人々が健康で幸福な社会は境界線のない一つの社会です、その社会の実現を考えていくことが大切です。

ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センは、積極的に主体的に社会全体の目標に向かっていく人間の姿を、エージェンシーと呼びます。エージェンシーの姿にある人間には、よりよい社会に向かうために、境界にある壁を切り開いたり、乗り越えたりするためのケイパビリティという能力があると言います。また、ケイパビリティには、負の状況にも、答えの出ない時代に耐える力であるネガティブ・ケイパビリティがあり、コロナ禍においては、自粛生活に耐え、ストレスを跳ねのけていかれる力、ネガティブ・ケイパビリティが大切です。このネガティブ・ケイパビリティの概念は、これまでの教育では扱ってこなかった能力ですが、今、教育界でも注目されています。

『インクルージョンとは、何か？—多様性社会を考える—』（荒巻恵子著、日本標準、2019年11月刊行）では、インクルージョン、ダイバーシティ、エージェンシーやケイパビリティについて、解説しています。ブックレットの読みやすいものになっています。ネガティブ・ケイパビリティについては、帚木蓬生氏の『ネガティブ・ケイパビリティ —答えの出ない事態にも耐える力—』（朝日新聞出版、2017年）が刊行されています。是非、読んでみてください。



筆者紹介：帝京大学大学院教職研究科教授、東京学芸大学教員養成開発連携センター特命教授